

森田思軒と黒岩涙香

——『レ・ミゼラブル』の翻訳をめぐる——

川戸 道昭

明治翻訳文壇に独自の輝きを放つこの二人の巨匠には、彼らが好んで取りあげる作品の傾向といい、またそれを翻訳する姿勢や心構えといい、ほとんど対照的といってもいいほどの大きな開きがみられる。一方は、ジュール・ヴェルヌなどの冒険小説を好んで紹介したのに対して、他方はセンセイション・ノヴェルに代表される欧米の大衆作家の作品を中心に紹介した。その翻訳態度も、一字一句ゆるがせにしない実直の姿勢で臨んだ思軒に対し、原作の面白いところのみを抜き出して一篇の作品に仕立てるといふような「叛逆」を平気でやつてのけた涙香。水と油ほどの相違があつたこれら二人の作家だが、一つだけ、これまであまり取りあげられたことのない共通点がある。それは、二人がともに、日本の文学界にはじめてヴィクトル・ユゴーの人道主義を紹介した功労者であつたことである。翻訳小説といえは、イギリスもの中心の、それも当時の社会情勢に乗じたきわもの的な翻訳作品が横行した明治二十年代の前半に、ユゴーが生涯訴え続けた死刑廃止という重いテーマを扱った作品を紹介した森田思軒、その流れを受け継いで、大作『レ・ミゼラブル』の翻訳を『噫無情』と題して日本の読者に紹介した黒岩涙香、両者との間を十九世紀のフランスきつての文豪の作品がとり結ぶ。しかも、二人はなんら関係もなくその翻訳にあつたというのではない。涙香は、思軒の晩年に、自らの経営する萬朝報社に思軒を招き、その没後は、思軒の遺志を継ぐかたちで『レ・ミゼラブル』の翻訳に当たつた。そればかりか、その翻訳にあつて涙香が底本として用いたのは、思軒が日頃座右において親しんでいた『レ・ミゼラブル』の英訳書であつたという。この明治の翻訳文壇に燦然と輝く二人の文学者が、たがいに親交を結び、その親交を基礎に『レ・ミゼラブル』の翻訳を世に問うていくまでの状況を、実際に彼らと交渉のあつた人々の証言を中心にたどつてみることにする。

まず、二人がどのようにして西洋文学の原書を手に入れたのか、一つ面白いエピソードが残されているのでそれを紹介しよう。話の出どころは、木村毅の『日米文学交流史の研究』という書物である。木村は、日本で最初にジュール・ヴェルヌの『八十日間世界一周』を翻訳した川島忠之助の直話として、思軒や涙香ら当時の翻訳文学者たちが洋書を入手する様子を次のように伝えている。

《ところで思軒はどうしてポーを発見したか。明治訳壇の先頭に立つ川島忠之助が訳したジュール・ヴェルヌの「八十日間世界一周」をよんで、政界の名士で大隈参議の知恵袋の矢野文雄（竜溪）が非常に興味をもち、報知新聞を主宰していた彼は、今後の小説はこうあらねばならぬと思った。

それで参考のためヴェルヌの英訳を幾種類かとりよせると、その裏ページの広告に多くの探偵小説の広告がのっていた。そこでそれを注文すると、きたのが Seaside Library や Lovell Library であった。

その中の Gaboreau や Fortune de Boisgobey や Miss Bradon や Anna Kathreen Green のような低俗な sensational novels は、主として黒岩涙香がよるこんでこれを訳し、Jules Verne や Victor Hugo, Zschokke など、すこし程度の高いは思軒がうけて、これを訳したのだという。——私は川島忠之助翁の生前、じかにそう聞いている。東京大学の高田、坪内とは別な西洋小説流入のチャンネルがここにある。》（『日米文学交流史の研究』恒文社、昭和五七年六月）

ここに記されていることがもし本当であれば、これは日本の翻訳文学史上見逃すことのできない特筆すべき事柄である。よく知られるように、日本で最初にヴェルヌの作品を紹介したのは川島忠之助であった。その川島の翻訳に刺激を受けた矢野龍溪が海外から取り寄せた小説の原書を、森田思軒と黒岩涙香が分けあった。一方は明治の「翻訳王」の名に相応しくヴェルヌやユゴーといった「すこし程度の高い」作品を、また一方は大衆新聞に筆を執る娯楽作家に相応しく、ガボリオやボアゴベ、ミス・ブラッドン等の「センセイショナル・ノヴェル」を受けもった。そしてその逸話を木村に語って聞かせたのがほかでもない、川島

忠之助その人であった、と。なんだかこれは、史実から逆に推しはかった作り話のような感じがしないでもない。

しかし、これをまったく根も葉もない作り事として片づけてしまふわけにはいかない、ある状況が存在する。ここに名前の登場する四人の著名翻訳家は、一見関係がなさそうで、実はある一つの縁で結びつけられているのである。彼らをつなぐその縁とは、すなわち、慶応義塾という学校である。川島の有名な『八十日間世界一周』（前編明治一一年刊、後編明治一三年刊）は、その「売捌書林」が「慶応義塾出版社」となっている。川島の翻訳を読んで感銘を受けた矢野龍溪が、同種の小説の原書を海外に発注し、届いた書物を慶応義塾における愛弟子の森田思軒に与えるというのは十分考えられることである。そして、さらに、思軒が、同じ原書の一部をやはり慶応義塾の後輩の黒岩涙香にまわすというように、川島の「直話」通りではなかったにせよ、それに近いことがあってもおかしくはない関係がこれらの翻訳文学者たちの間には存在するのである。

龍溪と思軒がともにヴェルヌの書物について語りあう仲であったことは、龍溪の著した『浮城物語』（明治二三年四月刊）の序文に思軒自身書いていることだからここでは触れないとして、もう一方の思軒と涙香の関係はどうであったのか。両者の間には、互いに原書を分かち合うほどの親密な関係が存在したのか。

それを確認するために、涙香の慶応義塾入学前後の経歴を簡単に振り返っておくと次のようなものである。生まれたのは、文久二（一八六二）年九月のことで、生地は、土佐国の安芸郡。明治十年、大阪英語学校（第三高等学校の前身）に学んだのち、十四年九月、慶応義塾に入学する。同校における涙香の成績は抜群で、十四年九月から十二月までの「学業勤惰表」（成績表）には、「科外」「甲組」の筆頭に「黒岩周六」の名前がみえる。「読方大試業割合」が「九〇」となっていて、二番の者は「八一」とあるから、他を寄せつけない抜群の成績であったことがわかる。彼は慶応義塾以外にもいくつか学校の門をくぐるが、「生来教科書に律せらるゝを厭ひて一も卒業するに至ら」なかった（『慶応義塾出身名流列伝』実業之世界社、明治四二年六月）。ちなみに、慶応義塾における思軒との関係はどうであったかという点、思軒は涙香が入学する四年ほど前に同校を退学し郷里の笠岡に帰っていたから、二人が学生として同席するということはなかった。

2

では、その後の二人の関係はどうか。この明治の翻訳文壇に独自の輝きを放ち続けた二人の巨人が、洋書を交換しあうほど互

いに接近した時期があったのか。わたしの調べたところでは、短い期間ではあったが、確かにそのような時期も存在したようだ。それは、思軒の立場に立っていうならば、長年勤めた郵便報知新聞を退き、さらに客員として迎えられた国会新聞社を辞して（明治二八年二月）、浪々の身を余儀なくされたときである。これを、涙香の側からいうと、自ら発行する『萬朝報』の売り上げがようやく安定し、同紙が名士の私行や家庭の秘事を暴くの力を注いだことから、とかく「赤新聞」「悪徳新聞」などの陰口をたたかれたのを、それではならじと評判の建て直しにかかろうとしていた時期である。実際、双方の求めるところが一致して、思軒は、涙香の萬朝報社に雇い入れられる。涙香は、のちに「森田思軒を悼む」と題した追悼文の中で、思軒と萬朝報社の関係を、同社の設立当時にまでさかのぼって次のように回想している。

《嗚呼、親友森田思軒死す、余が思軒に於ける何の語を以て其情を尽さん、曾て余が同志数名と共に萬朝報を起すや友人皆余が自ら力を搦らざるを笑ひ失敗に終らんを嘲る、独り思軒大に同情を表し語を寄せて余を励したり、当時余思軒を深く相知らざるなり、思へらく友人に知己無くして其以外に知己あり、豈に其寄語に負く可けんやと、爾来余は此の感慨に鞭撻せられ、艱苦にも蹉跌にも、之を想起して蹶起邁進せり、既にして萬朝報稍や頭角を現し同業諸社の疎外する所と為るや、全国の受売人、諸社の謀に合し朝報に反して起つ、余病氣を以て殆ど之に当る能はず、之いて思軒に計る、思軒奮然として曰く斯の如きの際、空言何をか為さん、余身を以て之に当らんと、来りて朝報社に入れり、世人驚いて相伝へて曰く、名士朝報社に入る、朝報復た侮る可らずと、思軒の入社、朝報社の意を強くせしこと実に百万の兵のみならざるなり、爾来思軒孜孜として意を記事の改良に致し、新案百出同業をして目を刮せしむ、先に朝報社を疎外せし者、風を望んで散じ朝報の行路頓に安く、声価亦前日に百倍す》（黒岩涙香「森田思軒を悼む」『萬朝報』明治三一年一月一六日）

涙香がいかに思軒の存在を重視していたかは、萬朝報社において涙香が支払った給料が月額百円という高給であったことからもうかがえる。当時、新聞記者の月給は十五円ぐらいが相場であったというから、思軒に支払った百円というのは単なる客員記者の俸給としては法外に高い。涙香にとって、思軒の「品格」は何ものにも代えがたい至宝であったということになる。

この追悼文と同じ日に『萬朝報』に掲げられた「IN MEMORIAM」と題する英文の追悼文によると思軒が萬朝報に加わったの

は明治二十九年十一月とあるから、思軒の在社はわずか一年ほどにすぎなかった。しかし、その間に涙香は思軒を「親友」と呼ぶほどの親しい交わりを結んだ。そのことは、涙香が思軒に対する追悼の文章をこんな言葉で結んでいるのをみてわかる。「友として思軒の如く良なるは世復有ること莫し、思軒を失ふの悲しみは思軒を友とせし人に非ざれば知る能はざる所なり、哀夫」。

3

ここで二人が親交を結んだ結果、最も大きな利益をえることになったのは、ほかでもない日本の読者であった。思軒は、萬朝報に雇われた一年後、腸チフスにかかって急逝する（涙香の家に花札を引きにいき、その後間もなく腸チフスを発症したといわれている）。しかし、思軒の肉体は滅んだが、その志は生き続ける。思軒と涙香の関係が真の文学史上の問題として意味をもちはじめるのは、この思軒急逝以前と以後の二人の仕事に注目したときである。さらにそれを特定すれば、思軒が明治二十年代に心にあたためていた最大の文学的テーマを、涙香が引き継ぎ、それを明治三十年代の文学界に蘇らせたという事実注目したときである。いってみれば、それは思軒から涙香へと引き継がれていく文学テーマの十年ごしの結実であった。二人の連携のもとに行われたその仕事をテーマ中心に簡単にふりかえると次のようになる。

思軒という作家は、今でこそヴェルヌの『十五年漂流記』の翻訳者ということで知られるが、当時はむしろ社会の弱者、とりわけ獄舎につながれた囚人の境遇に強い関心を寄せる社会派作家としての評判のほうが高かった。ヴィクトル・ユゴーの人道主義にもとづいて「社会の罪」という考えを世に広めたのもほかならぬ思軒であった。彼は、ユゴーが生涯訴え続けた死刑廃止という重いテーマを扱った「クロード・グー」という作品を、早くも明治二十三年一月に『国民之友』に発表する。

この作品は、人見一太郎の『ユーゴー』（民友社、明治二八年五月）によれば、「社会主義のエトナ山たる『悲惨』『レ・ミゼラブル』に通ずる伏脈」と位置づけられる作品で、作者の狙いは、主人公のクロードが盗みを働くにいたった理由、殺人を犯すにいたった背景に読者の関心を向けることにあった。獄舎につながれたクロードは陪審員に向かってこう叫ぶ。「余は殺人者なり、余は盗なり、然れども余は陪審紳士各位に問ふ、余は何が故に人を殺せるや、余は何が故に物を盗めるや」（思軒訳「クラウド」より）。このクロードの切々たる訴えは、作者ユゴーが処刑されたモデルの人物に代わって、社会に向って発した抗議の叫びであった。彼が盗みを働いたのは、貧困のため、劣悪なる社会環境のためではなかったか。彼を殺人へと駆り立てたのは、牢獄内の諸々

の不正のため、その不正を見てみぬふりをするのできなかった彼の正義感ゆえではなかったか。真に悪いのは彼なのか、社会なのか。このように、やむなく犯罪に追いつめられていった者の命を、追いつめた側の社会それ自体の責任を問うこともなく、人為的に葬り去ってしまうことが果たして許されるのかどうか。ここに提起されている問題は、のちに傑作『レ・ミゼラブル』にも受け継がれ、主人公ジャン・ヴァルジャンの人物造型の骨格をなしていくものである。「クロード・グー」が、フランスにおいて、最初に『ルビュール・ド・パリ』という雑誌に掲載されたのは一八三四年のことで、『レ・ミゼラブル』が完成するのは一八六二年のことであったから、作者にとつて、それは、いわば三十年ごしの追求テーマであったということになる。

思軒は、その『レ・ミゼラブル』にも早くから関心を寄せて、四十歳になったら翻訳に手をつけたいと周囲にもらしていたが、それを果たさぬまま病をえて、三十六歳という若さで逝った。自分の筆の力はまだユゴーの苦心の傑作を訳するところまで達していない（『懐旧』序文）という慎重な姿勢が災いし、最後まで目的を果たすことができずにこの世を去った。

思軒と涙香の関係がにわかには重要性を帯びてくるのは、この思軒のやり残した仕事を「親友」の涙香が引き継いだという事実注目したときである。二人がともに慶応義塾に学んだことも、思軒が涙香の萬朝報社に雇われたことも、あるいは、思軒が涙香の家に花札を引きに行つてそののちに腸チフスを発症して急逝したことも、二人を結びつける一つの要素にはちがいないが、それを分かちがたいものとするほどの決定的な要因とはなっていない。思軒と涙香という二人の文学者をむすぶ絆は、やはり、彼らが心血を注いだ翻訳文学上の仕事にかかわることではなければならない。その意味からいって、『レ・ミゼラブル』の核心をなす人道主義のテーマは、思軒と涙香という明治翻訳文壇きつての人気作家を一つに結びつける、まさに打つてつけのテーマであったということができるのである。

涙香は、思軒の逝つた五年後の明治三十五年十月、自ら発行する『萬朝報』に『レ・ミゼラブル』の翻訳の連載を開始する。それを題して「噫無情」という。この翻訳が思軒のやり残した仕事の延長線上にあったことは、それが単行本となったときの「小引」に涙香自らこう記しているのを見てもわかる。「若し我が日本にミゼラブルの一書を翻訳する必要ありとせば、必ずや人力を以て社会に地獄を作り、男子は労働の為に健康を損し、女子は飢渴のために徳操を失し、到る処に無智と貧苦との災害を存する今の時にこそあるなれ」と。

これは、思軒が「クラウド」という作品をとおして、日本の読者に訴えようとしたこととまったく同一のものである。その作

品が単行化されたときの序文の中に、思軒はこう書いている。「曰くクラウド、曰くユーベル、皆な粉々として現に諸君の前に群行せり。……独り恨む所のものは之を採拾し、之にシムバサイズし、之を精究殫論して、以て一世の眼を開く宏博にして、深切なるユーゴー先生無き耳」と『探偵ユーベルおよびクラウド』民友社、明治二四年一〇月。

思軒も涙香も、ユゴーになりかわって日本の民衆に「社会組織」の真のありかたを問いただそうとしたのである。ただ、違うのは、思軒は思軒の文体と翻訳態度をもって、また、涙香は涙香のそれをもって行つたことだ。そのことが当時の読者にとってどれほど幸運なことであつたか。漢文脈の響きになれた明治二十年代の読者は、思軒の力強い文章をとおしてユゴーの思想に親しんだ。漢文体が下火になり、言文一致体が大きな潮流となつていく明治三十年代の読者は、涙香の口語まじりのくだけた訳文によりそれをわがものとしていった。日本の読者は、思軒と涙香という福沢門下の文学者の連携により、十九世紀最大の文学作品をより身近なものとしていくことができたのである。

4

それはそうと、涙香は一体どんな原書を底本に用いてその翻訳にあつたのか。思軒の女婿白石實三によれば、その底本は主として、思軒が日頃座右において親しんでいた彼の「手沢本」（英訳本）であつたという。もしもこれが事実ならば、二人の間には確かに原書を分かちあうような関係が存在したことになる。そのことをもう少し詳しく知るために、白石自身の言葉を以下に引用すると次のようなものである。

「思軒は、レ・ミゼラブルの訳を、ライフワークの一つとしようとしたが、果さずして夭折した。黒岩涙香が『噫無情』は、友思軒の遺志を継ぐと揚言して訳したもので、萬朝報における涙香思軒の交りは短かい期間ではあり、ソリは合はなかつたらしいが、探偵小説の話はよく出たらしい。早くポーを訳した思軒は、ボアゴベの『鉄仮面』を訳することを涙香にすゝめた。『噫無情』を訳する時も、主として思軒の手沢本によつた。」（白石實三「根岸派の人々」『日本文学講座』第一一巻、改造社、

昭和九年一月）

ここには一つ明らかな事実誤認がある。思軒がポーの「盗まれた手紙」を翻訳して、日本で二番目の名探偵デュパンの紹介者となったのは明治二十九年一月のことであり、一方、涙香の『鉄仮面』が『萬朝報』に連載されはじめたのは明治二十五年の十月であつたから、「ポー」を訳した思軒が涙香にボアゴベの『鉄仮面』の翻訳を勧めるといふのは理屈に合わない。したがって、同一の文脈の中で書かれた『噫無情』を訳する時も、主として思軒の手沢本によつた」ということに関しても、それをどこまで信じていいのか、にわかに判断をくだしがたい。

しかし、それにもかかわらず、この白石の文章には、冒頭に紹介した木村の文章同様、読むものを思わずそこに引きこんでいくような一種不思議な魅力がひそんでいる。それは思軒と涙香にそなわる魅力がそうさせるのであつて、われわれはこれら二人の文学者にはさほど心を通いあわせるところはなかつたと思いつつ、ついつい両者を並べてその関係を云々してみたくなる誘惑にかられる。思軒の没後、涙香が遺された家族の面倒をみたことから、涙香と思軒の未亡人の間には何かあつたのではないかなどという憶測が飛び交うのも、一つにはそうした二人の魅力や知名度がありもしない空想へとかりたてるのだろう。つまり、それだけ思軒と涙香という作家が、明治の翻訳文学界、探偵小説界によく知られた存在であつたことになる。妙な風評はともかくとして、これら二人の作家の関係にはまだまだ調べてみなければならぬことが少なくないようだ。